

主人聞給ひ、兩人に暇給はりし、彼男日々夜々に千之丞宿に來、親彼が行跡不宜を見透、向後來給ふなといはれ、暫は來らざりしが、或時親他行の留主に來しを、早く歸られよ、今にもあれ親の歸りなば、互の爲も不宜といひしかば、親人こそあれ、其方はかくはいふ間敷事なりとて、脇指を抜千之丞を突つかれて、抜合ければ、逃て往を追欠しかど、深手にて倒死ぬ、親憤深て子の敵討たる様は有まじけれ共、可討兄弟もなき者なり、其某それ可討と公儀へ訴、許免を蒙ねらひ、伊豆の三島にて廻合潔討侍し、

復讐

〔明良洪範七〕備前ノ松平宮内少輔忠雄ノ家士ニ、渡邊數馬ト云者有リ、寛永七年七月廿一日、岡山城大手ニテ踊興行有ケル夜、右數馬ハ舅津田豊後方ヘ行き、跡ニ弟源太夫居タル所ヘ、同家中河合又五郎來リテ、源太夫ト談話シテ居タリシガ、如何ナル故ニヤ、又五郎主從四人ニテ源太夫ヲ切殺シテ立去ル略○中 數馬、又右衛門木○苑 主從四人、其日ヲ待テ六日ノ朝、仇ト共ニ發足ス、敵方ハ先ハ甚左衛門、中ハ又五郎、後ハ櫻井半兵衛也、弓鐵炮鍵等持セ、七八町續行き、其日ハ伊賀ノ島ガ原ト云ニ著ス、主從四人ハ見知ラレヌ様ニ、裏ノ道モ無キ所ヲ踏分來テ、宿ヲ借ント云故、人々怪ミ思ヘリ、爰ニ於テ四人ノ者ハ、敵ニ悟ラレテハ成ズト、夜深ク出テ山ニ籠リ、伊賀ノ上野小田町ノ酒店ニ最期ノ酒宴シテ待居ル略○中 又五郎同勢ハ七日ノ朝、島ガ原ヲ立テ上野ニ掛ル、又右衛門遙ニ見テ云、又五郎ハ數馬討ベシ、半兵衛ハ武右衛門、孫左衛門兩人ニテ討ベシ、甚左衛門始其餘ノ者皆某討ント云、此武右衛門、孫左衛門ハ、數馬、又右衛門ノ若黨也、サテ又右衛門ハ一番先ヘ乘來ル略○中 數馬ハ又五郎ト戰ヒ居ケル所ヘ、又右衛門驅來リ、數馬ヨクセヨ助太刀ハセズ、カナヒ難クハ代ラント詞ヲ掛タリ、數馬是ニ力ヲ得テ、終ニ又五郎ヲ討留タリ、略○下

〔日本武士鑑二〕鈴木安兵衛弟敵討事

延寶元壬子年極月の比、尾州名古屋御家中鈴木安兵衛弟同勘助と云有、傍輩笠原藤七と云者口